

九州の技 熱戦支える

連日、熱戦が繰り広げられているラグビーワールドカップ(W杯)。26日に九州での初戦が開催される福岡市のレベルファイブスタジアムなど3会場の屋根には、九州がルーツの素材加工メーカー「中興化成工業」(東京都)が製造した屋根膜材が使われている。同社関係者は「日本の技術力を世界に知ってもらいたい」と熱い思いを込めて見守っている。

【1面参照】



福岡がルーツ「中興化成工業」 3会場に屋根膜材



中興化成工業のルーツは福岡県の石炭事業。創業者の木曾重義氏は、多くの炭鉱経営者がしのぎを削つ



①中興化成工業の屋根膜材が使われている福岡市のレベルファイブスタジアム
②ラグビーワールドカップの試合会場に採用されている中興化成工業の屋根膜材＝10日、長崎県松浦市

た筑豊地区で「四天王」とも呼ばれ、長崎県松浦市にも炭鉱を持っていた。1950年代、エネルギー革命により石炭不況が始まると、石炭に代わる主力事業としてフッ素樹脂に着目。米国・タフファイバース社から技術を導入し、64年にフッ素樹脂製品の生産を

始めた。同市の炭鉱跡地に工場を設立。研究を重ねて独自の加工技術を開発した。フッ素樹脂は耐熱性や防水性に優れ、電気を通しにくい絶縁性がある。屋根膜材は、ガラス繊維にフッ素樹脂を焼き付ける特殊な加工を施し、国産品として初

めて開発した。薄さはわずか0・8ミリながら強度があり、紫外線にも強い。雨が降るとほこりや汚れが流し落とされるため、洗浄も不要という優れたものだ。製造できるのは世界でも数社だけという。88年に東京ドームの内膜に採用されると注目を集め、「鳥の巣」の愛称で知られる北京五輪のメイン会場(国家体育场)でも使われた。W杯では同スタジアムのほか、えがお健康スタジアム(熊本市)、エコパスタジアム(静岡県袋井市)の計3会場で採用されている。

(山本諒)